The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	待機するゆとり
Author(s)	会澤, 久仁子
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 14-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

のをたっぷり含んでいるからだと考えられる。

おそらく、「傾聴」によって人がケアされるかどうかは、こうした偶然的な要素が大きいものであり、またそれだからこそ、通常の積極的になされるケアとは別の意味でのケアがそこで成り立つと言えるのだろう。Aさんがこれまで生活してきた中で親しんだ言葉を、ゆっくり「聴く」ことを通じてAさん自身に投げ返す作業そのものが、ケアになるのである。それはある意味で、やろうとして出来る一方的なケアではない。そうではなくて、受け身に徹して「待つ」ことであり、ケアされる人が自分の生活の中で発した言葉を聞き逃さないための時間を設けることなのである。

（ほりえつよし　博士後期課程）

特集：ケアの現場に触れる

待機するゆとり

会澤久仁子

授業で村田さんから傾聴について伺ったとき、村田さんは、ただ話を聞くことが相手への援助になり、まず相手の話を上手に聞けることが援助の基本であると述べられた。私は、村田さんのやり方で上手に人の話を聞けて援助できるなら、やってみたいと思った。そこで、集中して傾聴を試みその感触を得て、また反省するよい機会になると思い、老人保険施設ガラシアでのボランティアに参加した。

私は初めてガラシアを訪ね、5階のフロアでボランティアをした。5階には主に軽い痴呆の方が入所されている。時によるそうだが、その日は入所者の方々は落ち着いていた。そのためか私は特別な違和感を感じることなく入所者の方々の中にいることができた。ただ、食堂で車いすに座ったまま眠っている方がかなりいて、私はそれを見ていると、その方々には何かすることがないのかと思ったりした。誰でも何かすることがあれば嬉しかったり楽しかったりするだろう。しかしそれぞれの方がどんなことをできるのかどうか、したいのかどうか、初めての私にはわからなかった。じっとしている方は、したいことができない環境だから、それをするのを諦めているのかもしれない。だから本人や周りの人は自由度の高い環境になるよう努力することが重要だ。しかしその一方で、本人にとっては限られた環境を受け入れることもまた毎日を暮していくための課題であろう。より多くの自由を求めることと、それがとても叶わず苦難を耐えたり、不自由や死を受け入れなければならないことの、その両方をよ

く見極めたいと思った。

傾聴については、私は９人の方々とお話しができた。そして２人の方からは長くお話しをうかがった。少ししかお話しをうかがえなかった場合もあるし、明らかにうまくいかなかった場合もある。しかしどの経験からも、傾聴について学び、考えることができた。

第一に私は、目の合う方とは何らかの会話や交流ができるものだと感じた。目の合う方のところへ行ってお話を伺っていると、別の方がこちらを見ていて、次にその方のところへ行くとそこでもお話できた。ただし、ある傾聴の途中しきりにこちらを見ていた方で、話しかければ一言二言受け答えできるが十分に話せない方がいて、私はその方とどう接したらよいか想像がつかず、その方の所に行けなかった。いま考えると、私はその方の所に行ってみて、二、三言葉をかけてみるとか、しばらく座ってみるとかするだけでも喜んでもらえたように思う。それは傾聴ではないが、十分コミュニケーションになるし、ケアになるだろう。また私は、車いすに座って寝ている方やずっとテレビを見ている方のことも気になって、声を掛けてみたのだが、やはりそのような方とはあまり会話にならなかった。だから、まず話したがっている方の話を聞けばよいと思った。

第二に、痴呆の方は何度も同じ話を繰り返すが、それでもとにかく話をしたい様子だった。私は恐怖や怒りの感情をぶつける相手として求められた場合もあれば、辛い体験を聞いてくれる相手として求められた場合もあった。またある方は自分の人生と人生訓を語ってくださった。そして何度も同じ話を繰り返し聞いているうちに、相手が別のことを思いだして話が広がることもあった。

第三に、傾聴をやってみる前は、こちらからいろいろ質問するのではなくて相手の話を受け止めて返すという傾聴のスキルに不自然な感じを抱いたが、やってみるとそうではなかった。傾聴のスキルは話し手の考えるスピードや順番に合わせて聞くためのもので、話し手に合わせないと話を聞くことはできない。聞手が質問や意見を加えるのを控えて、話し手の漠然とした言葉をそのまま受け止めて返す方が、話し手はもっと説明して聞手にわかってもらいたいという気になるようだ。スキルは、聞手が話し手を理解したいとか援助したいという気持から、相手を話しやすくし、話したい気にさせるために役に立つ。そしてよく話を聞いたうえで、聞手が理解したことをまとめて話し手に確認すると、話の内容と二人がそれを理解し、されていることを確認できて、話は進む。また今回はできなかったが、聞手は話の欠けている点を指摘し補う質問をすることや、意見することが必要な場合もあるだろうか。さらに、あくまで理解や援助の目的のために傾聴のスキルを使わなければならないと感じた。理解したり援助する気がないにもかかわらず傾聴するふりをすると、相手に誤解を与えたり、相手を欺くことにもなりうるからだ。

第四に、相手の方の名前をうかがい、名前を呼ぶことの重要性がわかった。相手の方は、名前をうかがったり名前を呼びかけると、ハッと反応される。名前を尋ね、名前を呼ぶことは、特定のあなたの話を聞きたいというこちらの気持を伝えることになる。私は、話をした方の名前をせっかく伺っても、別の方と話し始めるとその前に話した方の名前を忘れてしまったので、もっとしっかり覚えなければならなかったと反省している。さらに傾聴にかけた時間も記憶しておくと、どの程度傾聴できたかの一つの目安になるだろう。

今回のガラシアでの傾聴は、数人の方にそれぞれ一回のわずかなものであった。私たちがガラシアに行って入所者の方々に話を聞くことは、入所者の方々にとって不可欠な援助ではない。しかし、私が入所者の方々に交じって一日を過して感じたのは、老人や病人の世話をしたり、子どもを育てたり、人に様々なサービスをするような場所では、思いがけず相手方に何かあった場合にいつでも対応できように待機しているゆとりが必要だということだ。そのような場所では、忙しすぎてはいけないし、効率が良すぎてもいけない。だから、私たちのようなボランティアが入所者に交じってたたずんだり、話を聞いたりしているのも、入所者にとってちょっとしたゆとりを提供することになるのではないか。

（あいざわくにこ　博士前期課程）

特集：ケアの現場に触れる

老人保健施設の入所者とのお話をとおして感じたこと・疑問におもったこと

西村高宏

いくつかの困難な問題を引きずったまま、敢えてケアの〈現場〉へと跳び込んでみることにした。自分がはたして何ものとしてその〈現場〉へと赴いていくのか、あるいは、自分がいったい何を目的としてそこへと関わっていくのか、そういったことへの疑念・問題点への解答を依然として宙吊りにしたままでである。

われわれは、はたして何ものとして〈現場〉へと関わっていくべきなのか。毎週金曜日に行われる臨床哲学の演習では、幾度となくそれに対する議論が展開されてきた。われわれは、はたして何ものとして〈現場〉へと関わっていくべきなのであろうか、言ってみればこの問いは、そもそも臨床哲学というものを一方で意識しつつ、われわれは、はたしてどのようなかたちをとおして〈現場〉へと関わっていくべきなの